

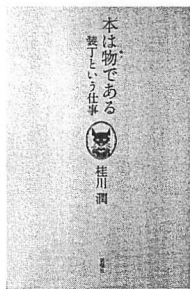
## 「本は物である」

書籍の電子化は装丁家にとっても影響は大きい。桂川潤著『本は物である―装丁という仕事』（A5判・242頁・2400円＋税）は、出版や装丁の歴史からデザイン・製作の基礎知識・装丁の実際までを解説しながら、電子時代にこそ求められる「本のかたち」を考察した、出色の装丁論・仕事論にして出版文化論である。

著者は本書について次のように述べる。〈現在、書籍電子化に伴って起こっている事態はどうだろう。紙やインキといった物質性、いわば「身体」を失ったテキストは、もはや装丁を必要としない。書籍電子化は、装丁家の存在理由を根本から揺るがす。だから本書でも、そこそこで書籍電子化について触れている。『商売敵』という気持ちも

ないわけではないが、それ以上に、電子ブックが読書という行為に及ぼす影響について、できるだけ冷静に考えてみたつもりだ〉。

全体は五章からなる。第一章は「装丁・ブックデザインとは何か」という根本的な問いを「装丁」「装幀」「ブックデザイン」などの表記の問題から説きおこ



本は物である  
桂川潤  
装丁の仕事

電子ブックの長所は認めながら、決定的な「負」の側面として「版」の喪失などを指摘し、次のように述べる。〈何より憂慮されるのは、「テキストの物質化」というプロセスの消失により、読書体験そのものがどう変質するか、それがどんな影響を人間にもたらすのかを、誰も予想できない点だ〉。

第二章は、『吉村昭歴史小説集成』製作の具体例を通して「装丁という仕事」を追う。

第三章以降は、著者が装丁家になりたいきさつ、さまざまな本づくりの体験など、より多様な視点から「装丁という仕事」を考え

る。エピソードの「金夏日さんの舌読」は衝撃的な内容であるとともに、テキストにコンテキストを与える「物である本」の本質を考

えさせられる。

「書物としての身体」をキーワードに考える。著者は